

News vol.8

2002.OCT

島根県古代文化センター



島根県立博物館の名品たち2

横綱土俵入之図

陣幕久五郎

(横綱・1829 - 1903)・歌川国輝

幕内通算成績 87勝5敗17分3預

現東出雲町出身。幕内在位中、6勝2敗1預が最も悪い成績で、「負けず屋」屋の異名がある。

弘化4年(1847)尾道の初汐久五郎に弟子入りし、黒緞はつしおを名乗り、翌嘉永元年、大阪相撲へ。嘉永3年に江戸相撲に移った。安政4(1857)年に陣幕久五郎を名乗り、阿波藩お抱えの安政5年入幕。松江藩お抱えの文久3(1863)年に張出関脇。元治元年、薩摩藩お抱えとなり、慶応2(1866)年に大関、翌慶応3年正月に京都五条家、同年11月吉田司家から横綱免許を与えられた。

出世を果たす前の嘉永7年には地元の筑陽神社で相撲を取っている。

引退後は大阪にて大阪相撲の復興に力を注ぎ、大阪相撲総長となった。角界引退後は、明治33年東京深川八幡宮の横綱記念碑をはじめとして建碑事業を行った。深川八幡の碑建設のために、配布した刷り物も伝わっている。

ちなみに年寄北陣の初代である。



雲州力士 一口メモ

1 化粧まわし

力士は藩の力を顕示する、現在でいえば広告塔の役割も果たしていたと考えられる。それ故、力士は、どの藩に属する力士なのか一目でわかる化粧まわしをしていた。雲州力士の場合、山形に子持ち二引き文様の化粧まわし、瓢箪つなぎ文様の化粧まわし（文化年間頃以後）が用いられている。展示では稲妻所用のもの（山形に子持ち二引き）と、越ノ戸浜之助所有のもの（瓢箪つなぎ）を紹介する。

これを表した川柳を一つ「殿様の禪でとる好い力士」

2 力士は終身雇用の公務員？

松江藩お抱え力士は、引退後も相撲頭取、「御水主」となり捨扶持をもらって老後の生活はもちろん、子孫ともども末代まで御水主として御船屋組に仕えることが可能であった。子孫が優れていれば士列に取り立てられることもできた。これは他藩にはない制度で、雲州お抱え力士が優遇されていたことがわかる。



勸進相撲 古今五虎勝 釈迦ヶ嶽
歌川豊国(三代)画 個人蔵

3 雷電、小野川を「投げる」、でも結果は引き分け

寛政2年冬場所、江戸相撲初土俵の8日目、雷電は当時の横綱、久留米藩お抱えの小野川と対決する。俗に『雷電日記』と呼ばれる『諸国相撲控帳』には「小野川もなげ候」とある。これだけ読むと、小野川に勝ったと思いきや、勝敗表をみると、勝負「預かり」という結果になっている。当時の力士はどこかの藩に抱えられており、いわば藩のメンツがかかっている勝負である。おそらくこの勝負は、横綱を抱える久留米藩に気がついた結果ではないか、とされている。

4 雲州力士は普段は何をしていたか

力士は御船屋組（藩米回船に乗る水夫たち）に属し、現在の東本町5丁目にあった御船屋の中に長屋1軒を与えられていた。御船屋の中には土俵があり、そこで稽古をしたり、殿様や重臣たちに相撲を見せたり、江戸などの勸進相撲がない時は日本各地を巡業して歩いていた。そのようなことがない時は、水主の仕事を手伝ったり、殿様の朝酌東照宮詣でや鷹狩りに付き添っていたようである。

5 博物館の隣で雷電は相撲を取った！

寛政5年8月、京都場所を終えた雷電一行は松江藩に戻る。そして8月28日から9月14日まで、松江で相撲興行が行われた。この時、不昧公の前で上覧相撲が行われたらしく、その絵図が残されている。土俵の場所は松江城三の丸、現在の県議会議事堂あたり。ここで雷電や小野川、陣幕島之助などが相撲を取っている。

6 なぜ出雲は相撲ゆかりの地

出雲は相撲ゆかりの地とされている。ここで紹介した雲州力士の活躍とともに、神話・伝承から、相撲の発祥を出雲とする考え方があるからである。

一つは『古事記』のいわゆる国譲り神話において、タケミナカタに国譲りの可否を問われたオオクニヌシは、息子2人にその意見を聞く。コトシロヌシはこれに承諾するが、タケミカズチは、稲佐浜で力較べを挑んだという。

もう一つは『日本書紀』の垂仁天皇7年の記述。大和国に当麻蹶速^{たいまのけはや}という強力^{たけみ}の者がいて、自分より強い者がいないと誇っていた。天皇がこれを知り、これに力が並ぶ者がいないかと聞いたところ、出雲国に野見宿禰^{のみのすくね}という者がいるという。そして野見宿禰を呼び出して、蹶速と対戦させた。宿禰は蹶速の肋骨を折るなどにして勝負に勝ったというものである。

二番目の話は、10世紀までに成立した『類聚国史』に相撲の項の冒頭に挙げられており、この頃までにはこの話が相撲の起源を語るものとして考えられていたことがわかる。

（参考文献）

酒井忠正『日本相撲史』、ベースボールマガジン社、昭和31年

小島貞二『力士雷電』、ベースボールマガジン社、平成10年

渡邊一郎・小島貞二『雷電日記』、ベースボールマガジン社、平成11年

荒木英信『松江八百八町 町内物語 末次の巻』、島根郷土資料刊行会、昭和48年

景山忠弘・小池謙一編『古今大相撲力士事典』、国書刊行会、平成元年

「相撲」編集部編『大相撲人物大事典』、ベースボールマガジン社、平成13年

第2回

神在月シンポジウム

「陣幕久五郎没後100年記念 相撲の歴史に迫る」

相撲にゆかりの深い島根県において、陣幕久五郎(現東出雲町出身)没後100年を記念して、相撲の歴史をふりかえり、島根が相撲の歴史において重要な役割を果たしていたことを紹介しながら、「相撲を取る」とは本来どのような意味を持っていたのかを明らかにします。



化粧まわし姿一人立 稲妻雷五郎
勝春和画 個人蔵

◆日時

平成14年11月16日(土)
13:00~16:40(開場12:00)

◆場所

島根県民会館中ホール
島根県松江市殿町158

出演者

花谷 幸三(相撲研究家)

新田 一郎(東京大学大学院助教授・中世法制史)

大日方克己(島根大学教授・日本古代史)

高埜 利彦(学習院大学教授・日本近世史)

中村 史彦(財団法人日本相撲協会相撲博物館・日本近代史)

品川 知彦(島根県古代文化センター主任研究員・宗教史)

入場無料

■主催 / 島根県教育庁古代文化センター

■後援 / 東出雲町教育委員会・東出雲町文化協会・朝日新聞松江支局・読売新聞松江支局・毎日新聞松江支局・産経新聞松江支局・日本経済新聞社松江支局・山陰中央新報社・中国新聞社・島根日日新聞社・新日本海新聞社・NHK松江放送局・山陰放送・日本海テレビ・山陰中央テレビ・エフエム山陰・山陰ケーブルビジョン株式会社

応募方法

①氏名 ②年齢 ③住所 ④電話番号

を御記入のうえ、往復葉書・FAX・e-mailでお申し込みください。(定員550名、先着順。)

申し込み先

〒690-0887 島根県松江市殿町1番地 島根県立博物館内 古代文化センター

Tel 0852-22-6727 / Fax 0852-22-6728 / e-mail kodai@pref.shimane.jp

編集後記

皆さん、相撲のルーツが島根県だってこと知ってましたか。しかも、神事の場面で行われていたなんて。先般の講演会で取り上げた出雲弁といい、今回の相撲といい、島根の古代文化は、本当に奥が深い。島根県には、まだまだ再発見されるべき良さ、歴史があるようです。一時期、翳りもささやかれていた相撲ですが、貴乃花関の復活で、また大ブームとなるきざしが見えます。古代文化センターも地域の皆様のお力を借りながら、歴博・古代研建設目指して頑張ります。この初冬は相撲一色です。ぜひご来観、ご聴講ください。

編集発行

島根県教育庁古代文化センター

〒690-0887 島根県松江市殿町1番地 島根県立博物館内

TEL 0852-22-6727 FAX 0852-22-6728

URL <http://www2.pref.shimane.jp/kodai/>

http://nextthdmuseum.pref.shimane.jp/shimane_2.htm

<http://www.pref.shimane.jp/new/inishie/>

e-mail:kodai@pref.shimane.jp

満員御礼 雲州お抱え力士たち

江戸時代、松平不昧公などに抱えられた松江藩力士たちは、江戸や大阪の勧進相撲で大活躍をしています。例えば、享和元年（1801）の番付を見ると、西方の幕内上位6人を大関雷電らいでんためえもんが右衛門、関脇千田川吉五郎せんたがわきちごろう、小結鳴滝文太夫なるたきぶんたゆう（現木次町出身）はじめとした松江藩お抱え力士で独占しています。また寛政8年（1796）年には、幕内に5人の雲州力士がいますが、全員で39勝1敗という好成績をあげています。

また身長2メートルを超す巨豪大関 釈迦ヶ嶽雲右衛門しゃかがたけくもえもん（現安来市出身）屈指の名横綱 稲妻雷五郎いなづまらいごろう、また薩摩藩お抱え時代に横綱となる陣幕久五郎（現東出雲町出身）ももとは松江藩お抱えでした。

島根出身の唯一の横綱 陣幕久五郎の没後100年を記念して、松江藩お抱え力士の活躍を中心に、島根における相撲の伝統の奥深さを紹介します。

期間

前期 平成14年10月29日（火）～11月17日（日）
後期 平成14年11月19日（火）～12月1日（日）
（前期と後期で展示資料が異なります。一粒で二度おいしい？展示です。）

場所

松江市殿町1番地 島根県立博物館

開館時間

9:00～17:00（来館は16:30まで）

入館料

大人200円 高・大生100円 中学生以下無料

◆雲州お抱え力士列伝◆

1 釈迦ヶ嶽雲右衛門しゃかがたけくもえもん（大関・1749 - 1775）

幕内通算成績 23勝3敗1分1預

現安来市大塚町出身。身長2.27m、体重180kgと伝えられる巨豪力士。雲州力士 雷電らいでんが五郎の弟子。大阪相撲に大鳥居雲右衛門の名で大関付け出し。明和7年11月、江戸相撲で大関付け出し。当時、大関は弟の大鳥居門太夫（後の稲妻咲右衛門）のように、力というよりは体つきなどから判断される看板大関であることが多かったが、この場所、6勝1預で実力も発揮した。江戸相撲は6場所出場し、現役で早逝した。『しずのをだ巻こしらえうま』には、群衆の中で一人腰から上が見えていたが、拵馬こしらえうまに乗っているのだろうと思っていると、これが釈迦ヶ嶽で肝をつぶしたという話や、朝夕の話に彼の噂ばかりが出ているという話が載っている。2月14日もしくは15日（涅槃会・釈迦の入滅日とされる）に死去したとされ、釈迦に縁があると評判になったと伝えられている。

賣布神社（松江市）には彼が使用したとされる袴や足袋、地元の大塚町には草履などが伝わっている。また大塚町には、弟が建立したとされる兄弟碑がある。また墓は松江市中原町の正覚寺に師匠で義父の雷電らいでんが五郎の墓と並んでいる。

「釈迦ヶ嶽二階から目へさし薬」という川柳も伝えられている。

2 稲妻咲右衛門いなづまさえもん（大関・1754 - 1838）

幕内通算成績 46勝17敗6分5預10無。

巨豪大関 釈迦ヶ嶽の弟。現安来市大塚町出身。安永3年（1774）大鳥居の名で大関張り出し。寛政3年（1791）稲妻咲右衛門と改名し、同6年、19年ぶりに幕内に復帰した。しかしながら、上位に雷電らいでんや千田川、鳴滝などがひかえていたために再び三役には上がれず、文化元（1804）年に51才で引退。

3 鳴滝文太夫なるたきぶんたゆう（小結・1764 - 1824）

幕内通算成績 93勝16敗13分10預9無

現木次町出身。天明6年に日登文太夫ひのぼりで三段目付け出し、八岐大蛇伝承をもとにした四股名、八頭関を経て、寛政元年、鳴滝沢右衛門、同2年に文太夫を名乗る。同6年入幕。同9年（1797）小結に昇進。戦績を見るように強豪力士であ

ったが、雷電、千田川が上位にいたため小結どまり。文化4年（1807）引退。

鳴滝の四股名は雲州出身力士に用いられたものである。

4 秀の山伝次郎ひでやまだんじろう（小結・1764 - 1823）

幕内通算成績 75勝29敗2分10預12無

現東京都出身。和歌ノ浦伝次郎の名でデビュー。天明7年（1787）秀の山と改め、寛政5年（1793）松江藩お抱えとなり、同7年入幕。享和元年小結昇進。幕内を18年間つとめ、文化9年引退、当年49才。享和3年からは讃州お抱えに転じ、これまで同じ雲州力士であった千田川や鳴滝を苦しめてい



釈迦ヶ嶽雲右衛門と女
磯田湖龍斎画
（財）日本相撲協会相撲博物館蔵



釈迦ヶ嶽雲右衛門袴（複製）
賣布神社蔵



釈迦ヶ嶽雲右衛門足袋
賣布神社蔵



化粧まわし姿一人立 雷電
勝川春英画
（財）日本相撲協会相撲博物館蔵



取組図 雷電・花頂山
勝川春英画
（財）日本相撲協会相撲博物館蔵

る。ちなみに雲州お抱えの時代に^{くにもと}国許入りした形跡がないといわれる不思議な力士でもある。

5 ^{らいでんため え も ん}雷電為右衛門 (大関・1767 - 1825)

幕内通算成績 254勝10敗2分14預

力士生活21年で10敗しかしていない強豪力士。土付かずの場所は24場所。大関在位は27場所(江戸相撲)。現長野県小県郡出身。天明年間に松江藩お抱えとなる。引退後は松江藩相撲頭取を勤めた。

負けたのは9力士で、花^か頂^{ちやう}山^{さん}に2度不覚を取っている(左下取組図参照)。余りにも強すぎて「張り手」などの3手を使うのを禁じられたと伝えられている。

相撲も強いが酒も強い。長崎を訪れた時、ある中国人との酒飲み合戦で36リットル呑んで勝ったと伝えられている。

ところで、寛政3年(1791)6月、江戸城吹上苑にて將軍徳川家斉の上覧相撲が行われた。この相撲は江戸相撲の名声を高めたものであるが、これに雷電はじめ、鳴滝、名草山など多くの雲州力士が参加し、白地に黒で「雲」と記した化粧まわしで出場。この時、雷電は陣幕島之助(東出雲出身の陣幕ではありません。)ののどつめ(のどわ)に敗れている(右取組図参照)。この時、立行司吉田追風は「陣幕になんの苦もなくはねだされ けふは負けてもらいでん(来年)はかち」と詠んだとされている。そして、引き続いて行われた本場所や11月場所において実際に雷電が陣幕を破ったので、この一番は特に有名になったとされている。

雷電がなぜ横綱になれなかったのは相撲界の不思議の一つとされている。雷電の墓は松江市和田見町西光寺にもある。

6 ^{かけし はつ ごろう}棧^{せきの とさわえ もん}シ初五郎 (関ノ戸沢右衛門・佐渡ヶ嶽沢右衛門) 小結・1767 - 1817)

幕内通算成績 92勝37敗21分3預3無

現群馬県出身。寛政5年、三百ヶ碓の名の時、松江藩お抱えとなり、同7年棧シと改名し、同9年入幕。享和2年、佐渡ヶ嶽を襲名したが、文化3年に関ノ戸と改めた。同4年に小結となった。同7年41才で引退後は年寄 佐渡ヶ嶽として松江藩との深い関係を持った。同10年冬の江戸場所の勤進元をつとめたが、殿様のご気分で雲州力士がこぞって不出場。頭を抱えるも、興行で損はしていないようだ。一体なぜ？

7 ^{せん た がわきち ごろう}千田川吉五郎 (玉垣額之助)(大関・1768 - 1813)

幕内通算成績 189勝29敗9分10預11無。

現長崎県出身。寛政年間松江藩お抱え。寛政6年(1794)入幕。文化2年(1805)年、師匠の名跡、玉垣を嗣ぐ。戦績に見るように強豪力士であったが、雷電が上位にいたため、寛政9年から文化8年まで14年間閑脇を勤める。土付かず9場所(全勝2回) 1敗の場所12回で3敗以上の場所はない。雷電引退の後、43才で大関となるも、1場所にて引退。

享和2年(1802)には雷電一行の九州巡業があり、その時に故郷に凱旋している。

8 ^{なるたきちゆうごろう}鳴滝忠五郎 (御所ノ浦)(閑脇・1782 - 1818)

幕内通算成績 45勝11敗6分1預

現木次町出身。文化9年御所ノ浦忠五郎の名で入幕し、場所中に鳴滝を襲名した。文化11年小結、文化12年に閑脇昇進。入幕以来2敗以上したことがない強豪力士で、時の大関柏戸利助とは3勝3敗1分と互角であり、大関を囑望されたが、文化15年(1818)2月に突然死。

大阪場所では文化11年・13年に大関を勤めている。郷里の円覚寺の墓石には「大関」と刻まれている。

9 ^{いただきせんの すけ}頂仙之助 (前頭筆頭・1794 - 1843)

幕内通算成績 85勝56敗10分5預3無

現秋田県出身。猫又虎右衛門の名でデビュー。文政9年(1826)頂を襲名し、同11年入幕。同12年お抱え。天保3・4年は土付かずの活躍をした。天保9年(1838) ^{えの えさんだゆう}鱈野上夢太夫と名を改める。晩年はお抱えを解かれている。前頭部にそり残しの髪を置く独特のヘアスタイルであった。

10 ^{あさかぜいし の すけ}朝風石之助 (貧乏神 = 現在の十両筆頭・? —1844)

現八束郡八束町出身。文政10年(1827)にはすでにお抱えとなっており、天保2年(1831)に十両に上がる。天保8年 ^{しこえやま}に四聲山と改め同10年貧乏神。



大名上覧相撲取組図 雷電・陣幕
勝川春英画
(財)日本相撲協会相撲博物館蔵



雷電為右衛門所用の煙管・煙草入
個人蔵



雷電為右衛門所用の大小袴
個人蔵



化粧まわし姿一人立 玉垣額之助
勝川春英画 個人蔵



化粧まわし姿一人立 鳴滝文右衛門
歌川国虎画 個人蔵



化粧まわし姿一人立 関ノ戸徳右衛門
歌川豊国(三代)画 個人蔵



稲妻(雷五郎)土俵入の図
歌川国貞画 個人蔵

稲妻雷五郎の土俵入りに太刀持を勤め、それを描いた錦絵も多く出されている（左下土俵入図参照）。それは朝風が殿様や稲妻のお眼鏡にかなう美男子だったからと伝えられている。また雷電為右衛門の家を嗣いだのも彼である（文政10年頃とされている）。大根島には彼の碑が立っている。

11 鳴滝文右衛門^{なるたきぶん えもん}（鏡山勇蔵^{かがみやゆうざう}）（小結・1796 - ?）

幕内通算成績 32勝17敗4分1預

現大東町出身。島根出身の3人目の鳴滝。文化9年（1812）鏡山勇蔵、文政元年棧シ初五郎と改名、同7年に入幕し小柳（後の阿武松）と同じ8勝1敗の好成績をおさめた。同10年に鳴滝を襲名し同11年小結昇進するが、そ



化粧まわし姿一人立 秀ノ山雷五郎
歌川豊国(三代)画



陣幕・鷲ヶ浜取組図 歌川国貞(三代)画 個人蔵



勸進大相撲興業之図 歌川豊国(三代)画 個人蔵



深川八幡公園地横綱記念碑之図



陣幕久五郎肖像画

の場所2敗8休で引退した。

12 濃錦里諾右衛門^{のぎのさとだく えもん}（不知火^{しらぬい}）（横綱・1801 - 1854）

幕内通算成績 48勝15敗3分2預1無

不知火の名の通り、現熊本県出身。傷害事件に巻き込まれ、妻子を残して大阪に出て力士になったと伝えられている。文政13年に松江藩に抱えられ、天保8年（1837）名を黒雲^{くろくも}から濃錦里に改めて入幕。この時すでに37才。同10年、肥後藩お抱えの時大関昇進。稲妻が出場したため関脇となるが、翌11年、不知火に名を改めて再大関で全勝。同13年春再び関脇となるが、同年10月には3度目の大関に返り咲いている。天保11年（もしくは13年）吉田司家から横綱免許。横綱になってからは晩年ということもあり好成績はおさめられなかった。

13 関ノ戸億右衛門^{せきの とおく えもん}（荒熊力之助^{あらくま}）（小結・1801 - 1856）

幕内通算成績 37勝13敗11分5預。

現宮城県仙台市出身。阿武松^{あづのまつ}を2度倒している（2勝3敗2分）強豪力士。文政13年（1830）荒熊力之助の名で入幕。天保2年（1831）関ノ戸襲名。同5年小結昇進。なお同4年に一度雲州抱えを離れ、郷土の奥州付きとなっている。同7年引退。同13年、関ノ戸を養子の御所ノ浦に譲り隠居した。

14 稲妻雷五郎^{いなづまらい ごろう}（横綱・1802 - 1877）

幕内通算成績 130勝13敗14分3預1無

「雷電と稲妻雲の抱えなり」と川柳によまれた雷電とならば雲州お抱え力士の代表。現茨城県出身。文政6年（1823）入幕前に松江藩お抱えとなり、同7年稲妻襲名。8年に小結、9年関脇に昇進。同11年五条家より、同12年には吉田司家から横綱免許が与えられた。幕内16年の間に13回しか負けなかった強豪力士。天保11年（1840）46才で引退。引退後は松江藩頭取となった。

東の横綱 阿武松とは好敵手で、通算3勝3敗1預5分。当時の人々はこの取組に熱狂したという。

五条家から横綱を許された時、天皇に召されて4斗入りの酒2樽の褒美を賜ったが、これを両手にさげて持ち帰ったという怪力ぶりも伝えられている。

書を良くし、俳諧の道にも通じていた。また相撲道の真髓を説いたとする『相撲訓』を残している。松江市南寺町の誓願寺に一族の墓が残る。

15 小松山富吉^{こまつやまとみきち}（前頭・1802 - 1841?）

幕内通算成績 26勝29敗3分2預

現千葉県出身。文政8年（1825）松江藩お抱え。天保3年（1832）貧乏神の時、横綱 阿武松を破る。同6年入幕。同9年、名を布川垣右衛門に改める。この頃お抱えを解かれる。翌10年に小松山垣右衛門に戻り、同12年引退。

16 秀の山雷五郎^{ひで やまらい ごろう}（横綱・1808 - 1862）

幕内通算成績 112勝21敗33分2預

現宮城県出身。歴代横綱中最も小兵（164 cmとされる）で、その努力により頂点をつかんだ力士と伝えられている。松江藩お抱えとなって、天保8年（1837）天津風雲右衛門^{あまつがぜ}の名で入幕。天保11年、盛岡藩抱えに変わって立神の名で関脇。天保9年から4場所は土付かずの強さを誇った。同12年には大関となる。不知火が大関にいたため、岩見瀧^{いわみきた}の名で関脇に降るが同15年に返り咲き、秀の山と改名した。弘化4年（1845）横綱免許を与えられた。